

社会科「研究の経緯」

昭和50年度以来、「自ら学ぶ」社会科の指導はどうあればよいか」を研究のテーマとしている。平成5年度からは、「作業的、体験的な学習」を位置付け、「表現力」の高まりをめざす取り組みを始めた。この「表現力」には「話す、かく、つくる、行うことによって表しだす」という他への働きかけとしての「発信型の表現力」の部分と「どう感じ、どう考え、どうとらえたか」を自分のものとして自分の中に表現する「受信型の表現力」の部分の2つの側面がある。「受信型の表現力」を踏まえた「発信型の表現力」こそが真の「表現力」ととらえ、「作業的、体験的な学習」の中に「表現力」の高まりを求めた。平成9年度からは「学力」そのものに視点をあて授業実践を中心とした研究を進め、平成15年度からは確かな学力を身に付けさせるための指導と評価にも取り組んできた。

そして、平成17年度からは、「実社会を生かす実践的な授業の創造」を副題に掲げ、授業の中で現実の社会を意識させることを重視し、生きて働く力につながるような実践的な授業の工夫に取り組んできた。

またこれまで、富山大学教育学部（現人間発達科学部）と附属学校園による共同研究プロジェクトにおいて、学部や附属小学校との連携を図り、学び方を系統的に位置づけた開発単元「富山プラン」を構想し、系統性を踏まえながら「基礎・基本」を明らかにするチャレンジも行ってきた。互いに出張授業や互見授業を行い、一つの題材において小学校の教師と中学校の教師が中学校において別のクラスの授業を担当することにより、両者の指導方法の比較を通して、小・中一貫した学力の系統性や指導の継続性についての研究を行った。現在も「楽しくわかる社会科の授業づくりを考える」をテーマに、共同研究に継続して取り組んでいる。

また平成17年度から3年間、エネルギー環境教育情報センターよりエネルギー環境教育実践校としての認定を受け、「実社会を生かす実践的なエネルギー環境教育の在り方」をテーマに、実社会を生かしたエネルギー環境教育にも取り組んできた。

平成19年度からは、「学びあい、自ら学ぶ」を副題として、社会科における「学びあい」の指導過程での工夫、「自ら学ぶ」につなげていくための手立てを中心に研究を進めてきた。